

# 新 おおさか KEYわーど 【第2回】

## 歴史に学び、社会を再考する機会かもしれない —少彦名神社の張り子の虎、適塾、市立大阪衛生試験所—

世界中に蔓延する新型コロナウイルス。人命だけではなく社会や経済への打撃も大きく、今後の医療体制や行政の対応のみならず、社会のあり方や生き方などの価値観も大きく変わらざるを得ない。講座や展覧会情報を伝える本誌も、講座や展覧会の延期や中止、休館情報が多くなっている。

こうした深刻な状況下、私には医療について適切なことを記すことは出来ないが、大阪の文化や歴史を再認識することが少しでも励みとなればと思い、大阪と感染症について歴史をふりかえりたい。

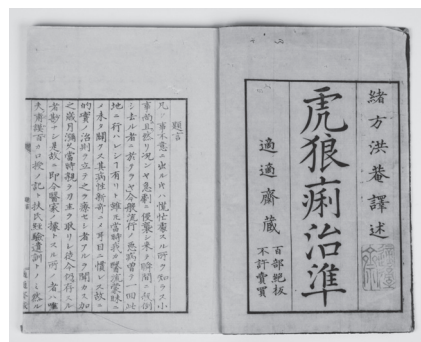
古くから様々な疫病が日本を襲ったが、大阪と感染症のよく知られる物語でいえば、神農祭で有名な道修町（大阪市中央区）の少彦名神社の張り子の虎がある。道修町は江戸時代からの薬の町で、長崎に輸入された漢方などの薬品価格も道修町で決められた。



大きな虎の張り子の右側に「祈コロナウイルス退散」と張り出されている。（少彦名神社）

文政5（1822）年、大坂でコレラが流行する。そのとき道修町の薬種仲間が「虎頭殺鬼雄黄圓」という丸薬を作り、虎の御守と一緒に施与した。同社の張り子の虎はこれに由来するとされる。コロナとコレラは語呂も似ているからか、少彦名神社にコロナウイルス退散でお詣りする人もいるという。

安政5（1858）年にもコレラが大坂で流行する。蘭方医で北浜に適塾（当時過書町、現中央区北浜）を開いた緒方洪庵（1810～1863）が、『虎狼痢治準』と題した治療手引き書を出している。



緒方洪庵『虎狼痢治準』（大阪大学適塾記念センター所蔵）

本の内容は、幕末の長崎で弟子を育成し、西洋式の病院も開設したオランダ人医師ポンペ（1829～1908）の口授内容をもとに、他の医学者で

あるモスト『医家韻府』、コンラジ『病学各論』、カンスタットの治療書も引いて、最新のコレラ治療法を示した冊子である。

洪庵の経験も踏まえて症状や治療法が詳しく解説され、流行の真つただなかコレラ対策に役立てるため、数日で編集され、治療法に悩む現場の医師に配布された。コレラ流行に直面した医師洪庵の使命感や緊張感が、コロナウイルスに直面した我々にも切実に伝わってくる。

洪庵の真摯さは、ベルリン大学教授フーフェランド（1764～1836）の著書を訳した『扶氏経験遺訓』巻末に戒めとして載せた「扶氏医戒之略」十二カ条でも分かる。

医の世に生活するは人の為のみ、おのれがためにあらずということを其業の本旨とす。安逸を思はず、名利を顧みず、唯おのれをすてて人を救はんことを希ふべし。人の生命を保全し、人の疾病を復治し、人の患苦を寛解するの外他事あるものにあらず。（第一条）

生命を第一に考える使命感やそれを守る高潔な人柄に打たれる。

近代になると、さらに様々な感染症が海外から入ってきた。大阪は商工業の要であり、海外との接触も多い。国や大阪府だけでの対応は不十分で、大阪市は衛生行政を一層進めるため、学術的試験研究機関として明治39（1906）年、市立大阪衛生試験所を設立した。後の大阪市立環境科学研究所である（2017年に大阪府公衆衛生研究所と統合して地方独立行政法人・大阪健康安全基盤研究所）。

創立2年後の明治41（1908）年にはペストが大流行し、その対策に邁進した。以来、様々な疫病や公害・環境汚染などの問題に活躍する。

普段は目立たない所で医療や公衆衛生に従事し、社会を懸命に支えている人々の御苦労と尊さを思うとき、近年、特に経済効率優先で語られがちな社会のあり方を、考え直しても良いかもしれない。

### 筆者プロフィール 橋爪節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ—増殖するマンモス／モダン都市の現像—』（創元社）など。